

生 實

第一卷九月號

□如何なる場合にも自分といふものを單なる自分として見ずに自分を社會の一員國家の一員であるとして見て行く時一切と共に行く眞の共同の生活が顯はれる。

□之と同時に此の社會と此の國家とを自分の國自分の社會であると思ふ時これ等の社會と國家とが如何にも自分のものとして眞に愛せずにはゐられない。

□斯の如くして更らに天地宇宙の構成を想ふとき我等は宇宙天地のものであり天地宇宙は我等のものであることの如何に事實であるかを發見することである。

□實に我等は宇宙の内にあり、而して宇宙は亦我等の内にあるではないか、宇宙の心と我等の心、そこに如來と我等との奇しき靈妙の世界は開かれてゐるのである。

□是の心して天地を見よ、天地は我等の樂園であり學園である。日月星辰、春夏秋冬、山川草木、禽獸虫魚、眺め來れば一として如來大悲の不可思議靈光ならざるはない。(念)

生 眞

くゆてき生は界世

目 次

- 世界は生きてゆく
- 信行の念佛(一) 土屋 親 道
- 懺悔録 演 阿 彌
- 瓦葺の話し 中 野 尅 子
- 唐澤別會開書 山 部 公
- 祈り
- 「吾朋」便り

人間に思想生活が興えられてあつた事は何より規定される。云つてもよい。思想生活の内容によりて規定され、怪物を退治せんと血眼になつてやつと切り伏せたりと思つたら石地蔵であつた様な概念の胃を叩き碎いた時更に又次の概念に入り込んでゐたと云ふ様な思索のみに生きる時は常に寂漠と痛恨とにさいなまれる。

佛に生かんとする所謂歸依佛の生活に於てのみ體験的思想生活がある。この南無佛の生活こそ人間最高價値の生活様式である。人間が眞實に生きる道であり寂光浄土の開顯すべき唯一の白道である。

彌陀の四十八願は私一人を生かさんが爲めに立てを眺めてゐる時莊嚴と嚴肅と緊張の中に熱い涙が滲み出て来る。

肩書で威かしたり親切相な言葉を操つて謙讓家振つたり、刹那の氣分で俄信者を手製したり我儘な世界の中に自製の信仰の世界を創造してゐる。人を審みつてゐるジャナイカ……と辯護する最後は「隨犯隨讞」を借りて來て罪惡亂造の調節器にする。恐しい事である。

後からゴジツケ説明や自己辯護で誤摩化して通るには餘りに苦しい世界が開けて來た足跡から光を放つ程の眞實道が歩みたいのである。(顯)

「一切を拜まずには居れませぬ。」

「凡てを見通がし聞き通がしてゐると何とも思はぬが、少し心して視れば恐ろしい程一切は生きてゐる。水の音も野の花も、額を傳ふ汗の一滴も、私達を醒ましめん爲めに説法し敷衍してゐる。世界はビクビク動く生命で埋つてゐる。」

「一里の道を旅行するには、馬、車、船、何れ丈け澤山のモノの献身を要するかも知れぬ。たゞ坐して居ればとて衣食住一切人類文化なくしては一時間の安全も得られぬ譯である、然れば常に我々は他の無數の生命を捉り喰つてゐる生物である、第一自分の生命を刻々に蠶食しつゝあることを忘れてはならぬ。刹那に屠りつゝある無數の生命に代ふるに意義ある一の生命を産みつゝあるか、眞に不朽に相當する新しき一を獲得しつゝあるか。」

「乞食も王侯も乃至は途上の牛の糞に至る迄悉く使命と意義あつて存する。存在するもの一として價値と依由なきものは無い。而かも此等無量の價値を犠牲とし積み重ねて、我れは眞に不滅の一大價値を創建しつゝあるか。」

「斯くして單なる物的關係の底に生命と價値とを見出したのは最も大なる自覺である、近代人の最大進化である、薄片らいシビリゼーションの殻を出て、正しく文化の世界に深化しつゝある。文化即ち綜合的の價値の世界とは宗教そのものである。此意味に於て政治も道徳も教育も經濟も、藝術、哲學も生きたる世界に向ひつゝある、宗教化しつゝある。」

「一人宗教人として醒める事は社會の一分を靈化した事である、否醒めた一人如來の裡に三千映然として浮び一切を淨化せずには措かぬ。實に世界の光りである。(尅)

眞 生

信行の念佛(一)

土屋觀道

古來から信行の問題に就ては東洋にも西洋にも幾多の聖賢によつて色々論ぜられてゐるが其の説の多くは信行一致となつてゐる。然るに念佛の信行に就てはともすれば此の二者の一致を論ぜずして其の何れかの一方に偏せんとするはどうした理であらうか、殊に眞宗の一派と浄土宗の一派とはこの二つに對する信仰上の争いがあつて、信を主するものは行を輕んじ、行を主するものは信を輕んずるの傾向がある。

然るに信行の問題は其の言葉の意味が廣うして、種々に解せられることであれば、念佛に關する信行問題も豫め其の信行の範圍内容を限定して之が研究をなすべきである。乍然今はさうした暇もないからして、直に信行の念佛そのものに就て成可く論歩を進めて見やうと思ふ。夫に就て一體信といふことは如何なる意味の信を指すのであるか、同じ信といふことも何を如何に信するかといふことが問題であつて、此の信の内容の異なるにつれては之を互に異安心とも云ふのである。されば念佛の信といふことも詳論すれば、更らに幾多の考究すべき問題が現はれて來る。乍然今は是等の多くの問題を避けて、單に念佛信行の問題に就てのみ其の考へを進めるつもりである。

然るに信といふことは單なる意味には疑いなきこと又は疑いなく信することであるが、詳しくいへば三種となる。一には人の云ふ通りにそのまゝを信すること、二には初めには疑いもあつたが理けが判つ

て疑が解けて信すること、三には現にそのことを實驗實證して信することである。而して一は人の教ゆるまゝを疑いなくさうだと信じた信であつて未だ何等の理解若は實證の信を以つてしたものでなく主として感情的のものであつて、之を佛教では信仰と名づけるのである。第二は其の理由道理を理解して疑いなくなつて之を信するもの故に、主として理性的のものであつて之を解信といつて前者と區別するのである。而して第三の實驗實證によつて之を體驗したるの信は之こそ眞實のものに觸れたるの信なるが故に之を證信と佛教ではいふのである。之は主として意的實證の體驗を意味するのである。乍然此の三者は一應の見解であつて私其の心が完全に三分せらるべきものでない限り只一應の見方であるが、其の信仰の性質上、其の心狀の落付きは仰信も解信も、證信を要求するの傾きがあつて、我等の信仰は漸時に證信の世界に到らねば止まぬものである。故に念佛の信仰も亦この三種の階程を以つて仰信の念佛、解信の念佛、證信の念佛となして見ることが出来るのであるが、結局は前二者と雖も第三證信の世界には入らずは到底満足のできるものではなく、むしろ此の證信の世界に至る前提として前の仰信も解信も其の信仰の意味をなすものと云ふべきである。されば一口に信の念佛といひ、又念佛の信仰といふのも何れの信を指して云へるかには信仰進歩の程度に於て最も大なる相違をなすものである。即ち同じ信すると云ふことも經驗の上には信ずると、未だ經驗を経ずして之を理解し、又は仰信するとは確かにそこには大なる事實の相異があるのである。故に前者は必ず後者の證信を待つて初めて眞實の確信に進むものである。而して此の前二者より第三證信に轉入するところ其の轉入の方法として用ゆるところのものが即ち行の念佛である。斯く云へば最も大切なる精神的宗教問題を最も卑しむべき形式の念佛に墮せ

しめたかの思いをなす人があるかも知れぬ。乍然夫は大に誤つた輕忽な考へ方であつて、斯くしてこそ初めて眞實の生活が精神的人格的に献身の力を以つて活動し來るものであつて、今云ふ行の念佛は正に仰信の世界より更らに證信の佛界に轉入せんとする歸命南無佛の實行行であるのである。故に一度此の實際歸命の念佛が如來に向つて行はるゝの時其の稱名念佛の内容に參究すれば實に驚くべき自己本心の要求が如來大悲の本願のみに復歸するの靈的更生の一大活動であることを發見し來るのである。而して、この念佛證信の世界こそは實に如來大悲の靈國、如來清淨の佛界、人類理想の究畢地、自己本心の靈界である。

乍然、疑つて云へば證信の世界は阿彌陀の佛界である、然るに如來の佛界は凡夫衆生の推考し得るところの境界でない、然ば我等如きの淺學非才、罪惡深重の生死の凡夫がどうして是等の佛界を證見することができやうか。如何にあせつても凡夫には凡夫相應の力しか之を信じ之を解することはできないはずである。然ば吾等にして如何に之を信じ之を解せりと思ひ、又之を證し得たりと信じたことも、其の實、夫は如來の眞境、如來の靈界を如實に信じ、如實に解し、如實に證せるものではなくして、其の相應に唯だ自分が勝手にさうだとさめ込んでゐる丈けのものではないか、して見れば各人が今日信じてゐると云ふ信も随分あやしいものとなるのであつて、夫れは全く個人的、又各自的の心相應に自から作つた想像に過ぎないものではないか、されば如何なる人といへ雖も、己が信じたことを以つて、直に如來の教への通りに之を信じ、之を解し、之を證せりと云ふことは果してその當を得た言方であらうか、と而して、世には已に斯くの如き考へを以つて現に信仰を見てゐる人も多々あるのであるが、乍然若し

之を斯くの如くに考へ來る時は吾等普通の凡夫に於てはとても佛界を知ると云ふことは夢にも出來ないことになるのである。否、世には確かにさう云ふ信仰ではないかと思はるゝ人も確かにあると信ぜられる點もないではないから大いに注意すべき事である。乍然若し全々さうとばかりするならば、我等凡夫の耳と心とを以つて如何に如來の大悲をき、如來本願の謂れを考へ得たりとするもどうして如來と等しき證信の世界を知り得やう。而して、我等は遂に永劫に如來の佛界に入ることは絶対に不可能となるのである。乍然、靜かに如來大悲の本願に耳傾むけ、自己本心の内省に心を留むる時、止め止めんとして止め能はざる自己本心の生の要求は宇宙の本心たる如來大悲の本願に催されて、南無佛、歸依佛の當體として念佛の一行に立たざるを得ざるに至るを覺ゆるのである。是の時一切の疑念は立どころに消散し、無明煩惱の闇の中よりも南無佛と叫ぶ本心の念佛には輝々として輝く如來の慈光を感じし仰信も解信も證信も今は議論を外にして只此の二行の當體に明了として和解し來るのである。茲に於て一切の生活は悉く自己内證の妙境と變じ、如來大悲の靈光に接觸しては、覺佛體現の理想をも確立して、信仰應分の自覺も必ず現はれて來るのである。

乍然斯の如きの妙境は只だ念佛によつてのみ得られるものである。如來はこのことに就て、大無量壽經の中に念佛せよ、念佛するものは必ず彼の佛國に生ずることができるとの教へを以つて示されてゐる。されば若し我等の力を以つてなし得る信仰の第一歩を云ふならば夫は如來の本願の謂れを聽くことによつて自己の本心から如來の大悲を信じて念佛するといふことである。而してその本願の念佛とは心から救け玉へと如來に南無する許りである。即ち現實に飽き足らぬ自己の本心が如來の大悲に憧がれて

彼岸に到らしめ玉へと念ずる歸命本願の念佛である。換言せば如來を離れ勝ちなる自己の本心が自己の要求する本心の世界に在しますと信ずる宇宙のミオヤに對して救け玉へとすがるより外には我等が如來を知り、如來を信じ、如來に歸命する方法はないのである。然るに豈に計らんや、此の本心の要望する佛界こそは如來大悲の世界であつて、自己内在の本心と宇宙遍在のミオヤの本心とが一致するの世界であつたのである。故にそこには人類の理想輝き、永遠の生命と無限の向上とが圓滿せられるの世界であつて、全心肯定の靈界である。斯して自己本心の要求はこの宇宙の本心たる如來大悲に歸命し融合し靈化せられて其の目的を實現せんとするものである。而して之實に我等人類の思想生活に於ける一大變化であり斯して如來は人類文化の中心生命となり玉ふものである。永遠の生命と無限の向上とはこゝに初めて開かれ、人類生活の根本軌範も茲に明かとなるのである。如來を中心とせる仰信の生活は其の信仰の進むに従つて應分の證信となり、益々如來の神境に向上し轉入するに至るのである。而も此の間又應分の解信も常に伴ふて發展し三者相助けは人格完成の生活となる。乍然その因をたゞせば只單に我等の本心が南無阿彌陀佛と如來に打すが許りの念佛であつて、如來を離れぬ稱名念佛の一行に外ならぬ故に南無阿彌陀佛と申すことは若其の心の方から云へばミオヤどうぞ救け玉へと如來に打すが祈りである。而して此の祈りこそ、如來本願の大悲を信するばかりでなく更らに如來の本願に乗じて如來に歸命するところの念佛であつて、此の念佛を本願の念佛、行の念佛とは云ふのである。されば祈りの念佛は歸命本願の念佛であつて、我等がミオヤに歸る本心の願ひである。されば此の外にそこに二つの信行としての念佛はなかつた唯一歸命の念佛が衆生の心より如來の心へと祈られるばかりである。乍然靜

かに此の念佛の實相を觀すれば其のもと、如來の本心より三界の衆生救濟の爲めに顯はれたる宇宙大悲の願心が衆生の心を動かして如來の本心に歸る姿であるとも見らるゝのであつて、永い間の如來の御苦心が今漸くにして成就せらるゝ處とも觀らるゝのである。而も吾は今初めてみ親の心に叶ふて本國に歸るべく、如來のみ名を呼ぶのだと思へば如來大悲の満足も如何ばかりのことであらうと思ひやるだに感激のきはみである。而して又之を私共の向上生活として見る時は、この時我等は始めて永劫不死の靈界に歸り、如來大悲の溫顔に面接しては如來の靈化を受くるのであつて、思い出すだに莊嚴のきはみである。大きく申す念佛も小さく申す念佛も申す念佛の聲こそ異なれ、行住坐臥にも如來を離れぬ我等の希念は魂も消ゆる許りの喜びである。思へば有難きことなる哉、無限の喜びと望みと方とは茲に始めて確立し、思へば思ふほど身にあまる人生の至幸を感謝せずにはゐられぬのである。

乍然是の如きの念佛は決して單なる信のみの念佛でもなく、又單なる行のみの念佛でもない。即ち信は行を離れない信であり、行は信を離れない行である。故に念佛稱名の實際は信の中には行が伴い、行の中には信が離れないものであつて、信即行、行即信の念佛であつて、信行不二、信行具足の念佛である。されば信なき念佛は眞の念佛でも眞の行でもないと同じく、又行なき念佛は眞の念佛でも眞の信でもないものであつて、少くとも如來大悲の本願の念佛ではないのである。更らに極言すれば信するところあつてこそ初めて念佛を申す實行の行ともなり、念佛申す實際の信仰であつてこそ初めて信仰の實際體験ともなるのであつて、信なき念佛も行なき念佛も眞の念佛となり眞の信仰とはなり得ないものである。(二二八、一五)。

懺悔録 (抄) 其七

演 阿 彌

○求道時代

私の喜びであり而して力て有り給ふ如來様よ。如來様の攝理として大正八年の二月聖者辨榮上人様から「土屋と云ふ熱烈なる青年傳道家がある。一度逢つて見たら如何か。幸ひ此三月一日からの祖山の別時へ行く序があるから今月下旬に寄つて貰つて話を聞け」との御手紙が来りました。然し丁度其頃子供が皆なで麻疹をして居りましたので「祖山の歸途に立寄り下さいませ様に御取手ひの程を」御願ひ致しまして三月の十八日に初めて土屋上人に御目に掛りました。停車場に御迎ひしました時S市のA氏と御一處で私の顔を見られてにっこり會釋された方がある。何だか風采の舉らない背の低い人でした。あの此人が土屋上人だな。それにしても少し服装を構はれたらよさ相にと其端的に思ひました。私が己前にS上人から聞いて居なかつたら恐らく失望しかけたかも知れませんが

私は敬虔の思ひで挨拶を致しました。而して人力で私の寺へと御案内致した。一番初めに搖られて行く上人の姿を見ながら云ひ知れぬ觀喜の心と而して一種の神秘情感とで私の心は躍りました。西の空は光雲變遷として瑞氣天地に漲つて居る様です。南は白虹圓形をなして如來の來迎かと危ぶまれました。上人は振返つて美しい空ですぞと指さされます。私は酔ひ心地とでも云ふ様な靈妙な感じて唯だ領づきました。やがて寺に着きましたから奥の座敷に請じ而して改めて御挨拶を交しました。思はざりき上人の奇しき因縁が此處に結ばれ様とは而してそれが辨榮上人の御媒であるとは更に一層の不可思議さでございます。——其夜の御話は「檀那寺の宗旨でなく自分自身の宗旨でなくてはならぬ。信仰に入る時初めて我が宗旨となる。我が宗旨となる時天上天下唯我獨尊たり得るのである」と云ふ要旨の而して堂々たる講演でありました。私は驚きました。現在の上に直に効果の顯はれぬ様な信仰は成程眞の信仰ではありますまい。信仰體驗のないものは眞の宗教に觸れて居

ないのに相違ありません。噫、私は實に迂闊であつた。そうだ眞の宗教を知らなかつたのだ。唯我獨尊と云ふ様な大それた考は起し得ないけれども少くとも如來の實在を證し得る所に迄達せねばならぬ。成程信仰は死んでからの事ではない。又死ぬ時の準備の爲めでもない。現在の唯今必要なのだ。而して現在の唯今はつきりし得らるゝ者なのだ。嗚呼初めて知つた。嗚呼私の道は頓に明けられたのである。之は善い人に御目に掛つた年來の望み茲に叶ふ可き時節が到來したのだ。私の血は力と望とに湧き立ちました。而して觀喜と驚愕とを感じ乍ら座敷に戻りました。座敷では圖を畫いて求道入信修道體現の御話がありました。船頭の譬などは本當に適切なもので低級な私達にも好く諒解されました。然し一つ判らぬ事がある。それは求道位の精神内容と入信位のそれとの相違點であります。翌日其事を御尋ねしますと、想像では似て居る様に思はれるけれど事實はつきりと明かに相違を自覺されます。而して夫れは最も大なる境界をなして居るものでありますとの御答で

した。成る程そうに違ひない。又たそう無くてはならぬ。私は嬉しくなりません。眞に道を聞き得たる喜びです。然しまだ如何も雲を隔てゝ月を見る感がしますけれどそれは無理もありません。そこで非常に共鳴した二三の會員の方と而してS市のA氏とも相談をして毎月では經費の點も有るから隔月にS市と兩方へ御出でを願ふとに決し上人の御快諾を得ました。然し五月は他の地方を巡らねばならぬから六月初旬にして呉れとの事でした。さあこうなると次の會が非常に楽しくもあり待遠しくもあります。私は時々御念佛をしに本堂へ参ります。大熏香一本位と云ふ事ですすがそんなに長くは中々出来ません。先づ半分位の處です。無論本當の道心ではないのですからまだ々々前途は遼遠で御座います。待遠しかつた第二回目の講演は六月四日の夜開かれました。「報身如來の源泉より出でたる吾々の佛性は枯れる事なく永遠の生命と無限の向上とを體現し得る」事を演べて更に私達日常の生活が人生の眞意義に活きて居ない事を指摘して随分深刻に聽衆の腸を抉りました。私

の曾て知り得て居る佛性はさつぱり依體の判らぬもので如何もそんな持合せは無い様に斗り思へてならなかつたのでした。此の時初めて本當のものを知り得ました。「死に度くない」「よくなりたい」此の心が佛性であると聽きました時、あ、其れならば幸ひ持合せて居る。佛性とはそれなのか。私は大變嬉しかつた。が然し直ぐ悲痛なる反省に依つて心は暗くなりました。私は眞に豚の如き生を續けて居たのだ。「一度過ぎては又と返らぬ今日の一」日「噫、本當にさうだと思はざるを得ませんでした。座敷で大寶曼荼羅に就て御話がありました。馬燈の様にくるくる今晩の御話が想はれます。翌朝は少しく早く起きて朝の勤行を仕懸けました。如何したのかしつくりと念佛が出来ません。心はふはふはして自分の様な氣が致しませんから」「一層上人が起きられてから」と思つて已めて仕舞ました。其内にぼく々々音がし初めましたので早速本堂へ行つて大薫香を立て直し下陣の正面の處に座

つて上人の念佛へ低聲で和しました。此日私の眼は妙に露んで内陣の中は靄がかかつて居る様であります。何となく軽い神秘の感じて本尊様の御姿をぼんやり眺めて居りますと不思議にも時々本尊様が女になつたり稚兒になつたり致します。

(御断り致しますが低級な幻覺的な事を申し上げます事は誠に申譯も無い事です。古來から東洋の聖者方が神秘的な發表をなさいませぬのは、往々にして初心者を誤らせ而かも恐しき邪道に迷ひ入らしむる原因となり易い爲に恐しい仕業の一つと致されました爲めて御座いますから成る可くならば、私もかゝる事は避ける方がよいのであるかも知れません。けれども唯今では一般に常識も高くなつて居りますし事實宗教的過程の上にも一度は吃度通過せねばならぬ事で、宗教哲學や宗教心理學等の書物を御覽になつた方ならば直に御了解下さる通りでもあり。また私の求道の道程に於ては欠く可らざる重大事項でもあるのですから寧ろ大膽に申上げて仕舞ひませうと存じます。尙今一つ御願ひ致します事は初めは極めて低級な物であります但其れを冷笑する事は暫時御見合せ下さいませ。是非最后迄御覽の上で忌憚なき御批評を賜はらん事を切に御願ひ致します。)

私は如何も變てかないませぬ。之は私の心の反映が然かせしめるので有るから知れぬと思つて懺

悔の心も起りましたが又享樂的氣分もないとは申されませんでした。すると一番下の見がちよろろ々と私の傍へ参りました。氣が其兒の方へ散るの庫裡の方へ戻らせ而して本堂との境の戸を閉めて又念佛を致しました。やはり薄靄がかかつて本尊様が變手古になります。軽い懺悔心と初めて味ふ興味心とて口眞似の御念佛を續けて居りますと今度は隣寺のU上人が見えられて私の一寸うしろへ座りました。少し氣は散りましたが構まつて居られない様な氣がして前の様な心に滲つて居りますと總ての物はぼんやり見えなくなつて唯だ本尊様の白毫丈が白く光つて見えます。「噫、あの白毫相が光明赫耀とても云ふ様になつたらよからうに」と思つて居ますとピカリツと約三寸程に大きくなつたかと思ふ間もなく、スバツと大きな音がして天地晃曜として開け、立てば八尺位もあらふかと思ふ座像の佛體が無数の小菩薩をうしろに隨へ給ふて居らるゝのが見えました。私は頭の天邊から足の瓜先迄ピリリと電氣に感じた様に響けたので思はずハツとして平伏致しますと其瞬間、土

屋上人の身體から身體の輪隔なりに白光輝くのを見ました。此時線香は丁度ともれて「願くは此功德を以て」と木魚は打ち切られました。噫、「平等一切に施し同じく菩提心を起して安樂の國に往生せん」。何と云ふ慈悲深い言葉でありますぞ。私は靈感に打たれて涙をばらばらと零ぼしました。「智恵と慈悲とに在ます如來よ。願くは常に慈悲歡喜正義安忍剛毅貞操謙遜眞實等の徳を體し外は怨親平等に同體大悲の愛を以て他に對し得らるゝ様に恩籠を垂れ給へ。」と。私は歎歎嗚咽して言葉も出ません。唯だ此文句を耳にして何となく尊とさを感じますのみで御座います。さるにても不思議よ。噫如何にしても變てある。「あゝ、そうだ私は自己催眠にかかつたのだ。そうに違ひない。それでなくてこんな事になる筈がない。何だそんな事なんだ。」間もなく私は此様に思ひ直しまして平素の様な心で庫裡へ戻りました。

瓦葺の話し

中野 尅子

暑い炎天で高い屋根を瓦屋さんが葺代へしてゐます、弟子達にやらせて親方は下で采配してゐる。

晝飯の合圖が鳴つたら皆が一聲に其焼鍋の底の様な棟から匍ひ下り初めた。もう梯子に届く頃になつて急に下から「氣を附けるよ」と呶鳴り付けた、そして頭梁は傍を顧み乍ら私に「彼奴等モウ一息と云ふ處になるとよく落ちましてね」と叫びました。山でも登る時より降る時が一層注意深くなる。財産も儲け出す時より失くす時の方が骨だとか或る老人が語つた、九仞の勞より一簣の方が重い、本當に此親方の一言が嬉しかつた。

信仰は情的だと云ふ、勿論知的概念の組織や意的道念の尻押しで精進して行く間は佛に借ひ乍らも悦びの中に觀念哲學の悲哀、何だか充たされぬ冷やかさが沁々と心を刺す、一度情に温かく輝いて如來様が裡に成り立てば自然に歡喜の力湧いて

拭つても拭つても、消し得ぬ眞實さを得る、本當にミオヤは呼ばれ導かれ、借はれて力の根源となつて下さる。それでは信仰とは斯麼に情的に熱いものばかりかと云へば、そう計りとは私には思へぬ、酒をあふつて一時的にパツと興奮した激情的なものだと云へば其れは一の塵睡劑に外ならぬ。

聽て必ず醒める時がある、醒めると云ふも全く毒素の絶滅した様に無くなると云ふ意味ではないが、感激が初め通り續くものでない事は明かである。即ち感情的に甘かつたものが理智的に消化し直されて來る事になる、すると前にあれ程悦ばれたものが何故此麼に悦れぬのかと非常に不安になり、信仰が退轉した如くに危ぶまれて來る。勿論懈怠して爰に陥る事は多いが、全くありし日のものが失くなつた如くに考へるのはどうかと思ふ。即ち瓦葺が屋根を下りかけた時である。下りかけたと云ふのは仕事から後戻りしたり、信を破壊すると云ふ意味ではない。仕事が進み一段落した證であり、信仰に一階梯が來た徴してある。そして其刹那餘りに先を急いで奈落に轉ずる。轉落の危険

は棟に居る時でも同じであるが内の充實の爲めにそれが無い。而して此過渡には外から乗せられる濼が出來てゐる、それで親方が弟子に注意したのも道理であつた。泥棒にでも荷物を背負つて家を逃出し掛けた時に一喝を喰はすと、盗んだ荷を抛り出して逃げる位だと心理學者は説いてゐる、宮本武藏も同じ様な事を言つてゐます。

信仰の場合に此時何麼ものに乗せられるかと云ふと即ち昔しの様な感激に最う一度涵りたいとの享樂氣分である、甘樂に依つて今の弛退を救はうとする窮策である、道樂氣分である。然し宗教信仰は常に興奮情態に限るものとは云へぬ、寧ろ透徹した冷靜の裡に燃ゆるばかりの生命の躍動を包むものなりと云つて可なりである。根沈も掉擧も一偏である。湛然たる平靜裏に九天を衝く理想の追求が無くてはならぬ、いつも夢見る様な心地で一定處に停滯してゐるより大なる佛の冒瀆はない、時々更改し佛の如く我も完成せんと生活の上に生命の上に無限の努力を惜まざる處眞に佛に救はれてゐると云ふ可きである、此創造生活に如

來は陰となり陽となつて増上縁となつて下さる、此精進にいそしめる程大きい惠はまは無く、大きい悦びはない。過程として嘗ての悦びは今の力、糧とはなるが味つても味はつても盡きぬ悦そは自覺せる眞の生活にある。他の小波紋的喜悦は大理想完成の爲めの一助縁に過ぎぬ、而したゞ空想的に釋尊と等しき自覺を口にし如來と同じき人格を懐れるものではない。眞に自己の現狀に飽き足らぬ者は必ずや其處まで望まずには居れぬだらう。猶進んで自己が一切を愛せんとする如く、他の一切をしても自己と同じく愛を遂げさせんとするより大なる悦びがさらうか。自己の欲する處を他をして又得せしめんとすること眞に佛の望みである。單なる覺他も自覺もない眞に徹する處自利も利他も絶した一大熾烈であるのみである。靜かに念するときは此理想は輝き、瞭々として如來は其建設道に立つて導き給ふ、私は是れこそ眞の信なりと思つて止まない次第です。

唐澤別時會聞書

山 郭 公

私は年來此谷間に住んでゐる老物だが、時々爰阿彌陀寺へ来て「別時念佛」とか狂人めいた事をする奴等を解せなんだ。今度も去三日から木魚叩きが初まつたから、二六時中間耳立て乍らよく見究めた。

世間離れた「三昧會」だなんて、又避暑代りの口實だな——位に睨んでゐたのだが、第一驚いたのは類齡七十五の亮誠老翁を初めお誕生祝の濟んだ計りの美智子君に至る迄、三十五人の道俗が全く一大家族の觀があつた事だ。地主も方丈も資本家も學生も皆裸で風呂水汲みやら、掃徐、洗濯、佛供養、勝手料理一切を悦んで勤めてゐる。如來を中心としての睦み、總べての仕事を生生の業として廻向してゐる、其儘が眞に念佛生活であり宗教の實體である、それ以外には概念も別時行儀も要らぬと思はれた位であるが、又勤精進の稱名念佛に因つて其生命の素を淨め、「別時に依て得たる力を尋常事態の上に體示するのだと導師の土屋先生が云て居られたのがなる程と領かれた。曉霧月月下挨拶を交はす敬虔さ、夜半孤堂に坐を頌つて信仰

を談ずる姿、其生活と人格の中に如來が籠て居ます事を側ながら嬉しく思つた。

六時の念佛と二時の法話、夜の信仰交話會も皆聞えた。朝の四時から夜の十時迄不離佛を心掛けて努めてゐる様が頼母しかつた。講話は初二日は別時三昧の意義要心を、中三日に先生の信仰歷程と先徳の指南とを對比考證して懇々と説かれた、後二日に至て宗教の本尊論と方法論を主題とし、機教相應、念佛と本願との實義に及び三昧現成の事態に迄入つて完結せられた、悉く身から滴る體驗に感奮させられぬ者は無かつた。先達内海さんも、「唐澤での別時會で前來無比の緊張味だつた」と嘆して居られた、黒宮多子様達が法悦の極感涙に咽んで一兩日坐から立たれなかつたのを見ては隨喜感動せぬ者は無かつた、帝大の本間さんや魚崎さん達の神秘的な經驗や透徹せる事を聞いては念佛が單なるセンチメンタリズムで無い事を考へずには居れぬ、行基寺さんは凡ての者が吾が爲めに居て貰れる様だと一切愛を述べられた、白旗さんの還愚行寸感、黒宮さんの入信談、桑原刀自の十七年間の信境、渡邊繁子さんの概念宗教中に在る苦心談、其他美和子さん本間さん中野の信仰告白、禪に深い上阪翁の四十年間の日課稱名感、など苦

闘の迹がまざくと亨け取られた。宮川様の下山前の痛烈な自責觀に入信の程度が問題になつた、そして信仰生活の實諦が生活の更進充實と人格の圓滿完成の事實を出ぬ事を一層明瞭に擱んだ。

渡邊金次郎様、河西佳助様同華様、白旗なか様、吉水ひさ様、花木鈴音様、今川恢蓮様、中野しん様、山本しづ様、足立ゆい様、黒宮孝壽さん、同花神谷善之助様、山田竹子様等對談の裡に深い體驗と美しい心とか煌く。

七日間を終へて自覺と勇氣に充ち、如來の理想を自ら實現せん望みに輝いて、いそいそと活世間へ下山して行く人等を見送つた時、本當に恵まれてゐる人々よと祝福された。

正しくものを見んとすればモノの中から出て見ねばならん、正しき批判に因つて内を看る時向上する。實社會に眞に徹して生きさんが爲めに入山するのだ。ドレ俺も里に出て啼かうか。

○祈り 岐阜 照 子

限りなきみ親の慈悲に照されて
一すじに知る眞生の道

○夜もすがら南無阿彌陀佛となふれば
夢路をたどる聖き御國に

○上人を停車場に見送りて

○かりの世にかりの別れをおしみつゝ
また遇ふ秋の法を待つなり

○名残盡きの窓邊にありて念佛を
ひたすら唱ふ夕闇のまに

○「眞生」を戴いて 岐阜 花 子

○遇ひがたき彌陀のしめしを蒙りて
たゆまず進む眞生の道

○大慈悲の光の中に育まれて
眞の道に生きるうれしさ

吾が朋便り(六)

ました願くば此の心を以つて今后實際の生活にも立度覺悟いたしました。

唐澤にては御親切のほど御禮の申様も無之候未だ如來と自己と同一には相成り難く候らへ共念佛のみは努力せずして我知らず心より無限に湧出づるやうに相成り實に有難き極みに存候。

「眞生」によつて私自身の生きる事の尊さを導いて戴きまして有難うムいます、無限の大悲と大智との光に浴して日々深化されて行く生命道に嬉しく立たせて戴いて居ります。

唐澤の御別時には是非共參列致し度存居候處長男の靜養の爲めに不參仕候次に昨九日は亡き伯母(清水ハル)の爲め御回向下され候趣有難く存申候。

□半田町 内田忠平様より
唐澤にては御親切のほど御禮の申様も無之候未だ如來と自己と同一には相成り難く候らへ共念佛のみは努力せずして我知らず心より無限に湧出づるやうに相成り實に有難き極みに存候。

「眞生」によつて私自身の生きる事の尊さを導いて戴きまして有難うムいます、無限の大悲と大智との光に浴して日々深化されて行く生命道に嬉しく立たせて戴いて居ります。

唐澤の御別時には是非共參列致し度存居候處長男の靜養の爲めに不參仕候次に昨九日は亡き伯母(清水ハル)の爲め御回向下され候趣有難く存申候。

□岐阜縣 行基寺様より
今回唐澤山の御別時は私にとりて眞に更生せし思ひ、歸寺の上本尊前へ參り看屬一同に喜びを頒ち將來の心得等も感涙の内に談じ、一種異様の感激に充ち々々上人の御指導を喜入り申候。

今年はお出る事の出来ぬ様に定められてあると見えて唐澤へも行かれませんでしたが皆様に御無法汰勝で唯如來様を通して思いやる丈けてムいます湖水(諏訪湖)のアナタに南無阿彌陀佛によつて顯はされたる靈妙の惑はたまらぬほどなづかしさを覺えさせられます。

今年六月以來病氣ばかりで今以つて全快いたしません。之も業を滅していたゞくと思ひますれば有難う存じます。

□桑名 八保田領太郎様より
唐澤では如來の本願淳々ときかせいたゞき誠に肺腑にしみて覺え

より眞生の光を頌ち給ふ事を深く感謝いたします。

正態の念佛中 法然上人の念佛が書かれてありましたが、私はあの現世を否定して未來を願ふことがどうしても肯定し易い様に思へます。是は如何なものでせう。生存の意義に就ても是の苦痛の種であるべき肉體を離れて無生の境地に入る準備の外何等の意義も無いと存じます。乍然、今直に死のうとは決して思いません、夫は單なる死が必ずしも無生の境界に入る方法だとは思へないからであります。

□名古屋 加藤喜知三様より
「私ハ常ニ上人ヲ離レテ居マスノニ係ラズ上人ハ暫シモ私ヲ離レテ下サラス。私ハ眞人デハアリムセン、然シ眞人ハ私デアリマス。」
念佛の一道に心の定まり候は全く上人の御恩にて候。今は稱名の中にしばしば眞佛の説法を聽得し佛智折情の自然修養を只々喜び申居候。「南無佛と稱ふる聲のたゞ中に己が姿を見るを嬉しき。」

□東京 石山吉子様より
唐澤の御別時にはぬけても參らして戴き、積る汚れをも清め度存候處止なき事情の爲め不參仕候同行の方々は日々信仰御増進の折から私のみ信仰退轉の心もせられ

□北海道 大石孝三様より
正態の念佛中 法然上人の念佛が書かれてありましたが、私はあの現世を否定して未來を願ふことがどうしても肯定し易い様に思へます。是は如何なものでせう。生存の意義に就ても是の苦痛の種であるべき肉體を離れて無生の境地に入る準備の外何等の意義も無いと存じます。乍然、今直に死のうとは決して思いません、夫は單なる死が必ずしも無生の境界に入る方法だとは思へないからであります。

□九州 大谷仙界様より
眞生の發刊を祝し併て健全なる御發展を祈り尙社中御一統の眞生

□大阪 藤田高印様より
毎度眞生を御目にかゝる思いにて拜讀いたしてゐます、小尼も御蔭にて慈光裡に法務いたして居りますがあまりに外の方に急がしくなりますと御別時に遠かつて心が荒んで来るやうに覺えて悲しうム

□舞鶴 高橋タカ子様より
残暑がきびしいので故上人様が如來を戀ふ愛の熱度が高ければ暑氣の熱ぐらゐに困るものでないと仰しやいました事がこの暑さで一層私の念佛の燃らぬところをは

□九州 大谷仙界様より
眞生の發刊を祝し併て健全なる御發展を祈り尙社中御一統の眞生

□大阪 藤田高印様より
毎度眞生を御目にかゝる思いにて拜讀いたしてゐます、小尼も御蔭にて慈光裡に法務いたして居りますがあまりに外の方に急がしくなりますと御別時に遠かつて心が荒んで来るやうに覺えて悲しうム

□舞鶴 高橋タカ子様より
残暑がきびしいので故上人様が如來を戀ふ愛の熱度が高ければ暑氣の熱ぐらゐに困るものでないと仰しやいました事がこの暑さで一層私の念佛の燃らぬところをは

□九州 大谷仙界様より
眞生の發刊を祝し併て健全なる御發展を祈り尙社中御一統の眞生

□大阪 藤田高印様より
毎度眞生を御目にかゝる思いにて拜讀いたしてゐます、小尼も御蔭にて慈光裡に法務いたして居りますがあまりに外の方に急がしくなりますと御別時に遠かつて心が荒んで来るやうに覺えて悲しうム

□舞鶴 高橋タカ子様より
残暑がきびしいので故上人様が如來を戀ふ愛の熱度が高ければ暑氣の熱ぐらゐに困るものでないと仰しやいました事がこの暑さで一層私の念佛の燃らぬところをは

つかりと慰まされていたいきました。實にはづかしいことでありました。

三重縣 中瀬小三郎様

唐澤山寺聞くに尊さと冷しさとを聯想いたします今繪葉書を拜見して一しは其感を深ふして居ります。

東京 美和子より

おなつかしき皆様、お暑さに御障りも入らせられませんか。御案じ申上ます。さて、唐澤御別時中は美智子に至るまで、朝夕言葉に盡し難き御厚志にあづかりまして御禮の申上げやうも御座いません。御座いて忙しい授乳やお洗濯の中からも、多少なりと御念佛の出来ました事を何より嬉しく深く感謝いたします。

登山するまでは美智子の事や、留守の事やらの心配が無いでも御座いませんでしたが、皆々様のあの緊張した御別時の精進を目のあたり拜し、凡てを捨て、三昧會に馳せ参じた私を心から喜ばずには居られませんでした。凡てを捨てしにはあらで、これが、凡てを真

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十一年八月三十日印刷納本大正十一年九月一日發行(毎月一回)發行(眞生第一卷第八號)

に生かす姿なのだ。と念ひました。老も若きも、如來様に全身歸命した人々の敬虔な御心盡し、どなたを見ても、どなたに逢つても、ほんとに尊い事よとをがれました。何といふ如來様の宏大な御慈悲でせう。何といふ幸福な私達でせう。九日は居残つた方々としみじみ、信仰談に名残惜しい夜を更かしました。月さへ残りをしげに仰がれました。歸京後幸に三人とも健在。美智子は唐澤以來、「のんのさんを」と申すと、可愛い兩手を合せて懸命に禮拜いたします。摸倣の偉大さを考へさせられます。あなつかしの皆様よ。時處位を問はず、恒に如來様をみつめ其の御力に依つて、必ず聖旨現はす身と成りませう。あはれ、永遠より永遠に佛縁なき法の友がさよさらば御すこやかに精進みまします。先づは御禮をかねて、心の一ふしを。南無阿彌陀佛。

寄贈並誌料拂込芳名

○寄贈の部○參圓也松浦重三様。○六圓五錢也唐澤三味會々計部より。○十圓也久保田領太郎様。
○誌料の部○六十錢也猪狩教子様。○壹圓也吉田富太郎様百々治也助様若山フサ様古座谷武兵衛様春徳寺様岩品誠信様福住様今川順運様渡邊金次郎様新井田秀子様。○各貳圓也中井常次郎様弓場あい子様。○各參圓也宮川與平様光徳寺様(案名)

◎誌代未納の方は便宜上振替に願上ます。

振替口座東京四七式八八番眞生社

大正十一年二月二日第三種郵便物認可

大正十一年九月一日發行(毎月一回)發行

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

編輯兼 土屋 觀道
發行人 東京市神田區駿河臺袋町一番地

發行所 眞生社
東京市外西巢鴨町二七二番地

印刷人 原 子 廣 宣
東京市外西巢鴨町二七二番地

印刷所 無我山房印刷工場